
思わぬ奇病

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思わぬ奇病

【Nコード】

N1896F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

未来。妻のクリステイの食事管理に嫌々従わされるジョン。ところが突然二人のいる惑星を奇病が襲い。健康管理は大事です。

第一章

思わぬ奇病

そう感じたのはたまたまだった。朝起きて不意にであった。

「！？何かな」

「どうしたの？」

妻のクリステイが怪訝な顔で彼に声をかけてきた。ブロンドに灰色の目を持つ妻は結婚して二十年を過ぎているがそれでも少女の頃の美しさを保っていた。

「風邪！？」

「いや、何かな」

自分でふと探ってみたが頭が痛くもないし身体がだるくもない。

何か急に違和感を感じただけであった。それも右足のごく一部にだけだ。

「ちょっと感じて」

「何を感じたの？」

「右足がね」

まずはこう答えたのだった。

「ちよつとおかしいんだ」

「痺れるとか？」

「そういう感じかな」

「親指の付け根？」

妻は今度はこう彼に尋ねてきた。

「それだったらひよつとして」

「そういえば近いか」

妻の言葉に彼も頷いた。言われてみれば違和感を感じたのはその辺りだ。

「そこに」

「痛風じゃないかしら」

眉を顰めさせて夫に言ってきた。

「それってまさか」

「痛風か？」

「だからビールを飲み過ぎなのよ」

今度は心配する顔だった。

「いつも言ってるでしょ。ビールは身体にあまりよくないから」

「そんなに飲んでもるか？」

「毎日どれだけ飲んでるのよ」

今度は咎める顔と声であった。

「あれだけ飲んでならない方がおかしいわよ」

「そうかな」

「そうよ。じゃあ暫くビールは中止ね」

「えっ……」

「ワインよ」

そしてこう夫に告げるのだった。

「ワインにするわ。いいわね」

「ワインはあまり」

だが彼はここであからさまに嫌そうな顔を妻に向けるのだった。

「どうもな。好きじゃないんだが」

「じゃあお酒自体駄目よ」

妻の言葉は実に厳しいものであった。

「それだと。どっちがいいの？」

「わかったよ」

観念した顔で妻に答えた。

「じゃあワインだよ。それでいいんだな」

「前から言ってるけれどビールよりワインの方がずっと身体にいいのよ」

ここぞとばかり夫に対して言うのであった。

「ビールは悪酔いするし」

「そうなのか」

「ドイツ人を見ればわかるじゃない」

「ここでドイツ人を話に出すのだった。」

「太ってるし頭は禿げてるのが多いし」

「ううむ」

この言葉で自分の腹や髪の毛を意識する。腹を見れば確かに最近出て来ているし髪の毛も心配になってきた。思い当たるふしがないわけではない。

「ああなりたいの？ドイツじゃ痛風は国民病よ」

「だからワインか」

「そうよ。痛い思いしたくないでしょ」

「ああ、まあな」

「折角ここまで大きな病気一つしていないのに」

こう言ってまた夫にビールのことを話すのだった。

「ビールを止めたらそれだけで違うから」

「じゃあこれから一緒に食べるのは」

「チーズ用意しておくわ」

やはりこれが出て来た。ワインと言えば昔からチーズである。これはそれこそ二十世紀、人類が地球にあつた頃から変わらない。遠く離れたこのシリウスにおいてもだ。

「あとは和風でお豆腐」

「お豆腐！？」

「これは凄く身体にいいのは知ってるわよね」

「ああ、それはな」

この時代豆腐は皆が食べる食べ物になっていた。その栄養の高さと健康へのよさもまた誰もが知っているものになっていたのだ。

「知ってるけれどワインにお豆腐！？」

「何言ってるのよ、ジョン」

妻はここで彼の名前を笑って言ってきた。やはり結婚したての少女の頃の微笑みそのままだ。テーブルの向かい側に座ってトーストを手で千切る動作も何処か少女らしい。

「日本人は白ワインでお豆腐を飲んだりするのよ」

「白ワインですか」

「お魚はそうじゃない」

妻はここで魚も話に出してきた。

「ムニエルとかそうでしょ？あとフライも」

「ああ」

これは彼もよく知っていた。実はビールでそういったものを楽しんできたのだ。ただワインが好きでないのでそうした食べ方をしていなかったただけだ。

「それと同じなのよ」

「じゃああれか」

ここでジョンはあることに気付いたのだった。彼もまたトーストを食べながら言うのである。

「お刺身とか天麩羅も白ワインになるのか」

「そうよ。牡蠣料理もね」

「日本人は変わってるな」

「あくまでワイン派だけよ」

こう断る妻のクリステイであった。

「日本酒がいい人はやっぱりそれよ」

「あれは少し」

日本酒が話に出るとジョンの顔が曇った。

第二章

「嫌だな、どうも」

「貴方日本酒嫌いだったわね」

「飲めない」

その曇った顔ではつきりと答えてみせた。

「とてもな。だから」

「じゃあ白ワインね」

「肉の時は赤だな」

「そうよ。それはわかるわね」

「わかったよ。やれやれ」

朝から大きな溜息をつくのだった。

「仕方ないか。これも」

「我慢するのね。まあとりあえずはそうして様子を見ましょう」

「診察も受けてか」

「そういうことよ。最近検査とか受けてないでしょ」

「面倒臭いからな」

これを理由として行っていないのだった。実にいい加減である。

しかしこうした人間が多いのもまた昔からである。面倒くさがりは何時でも何処でもいるものだ。

「どうしてもな」

「けれど今は駄目よ」

また妻の顔が厳しいものになった。

「わかったわね」

「ああ」

「これからお料理も変えていくから」

「乳酸の溜まらないものか」

「そうよ。まずはそれ」

声もまたさらに厳しいものになっていた。

「鶏肉やお魚もね」

「何かしみつたれた食べ物だな」

「そうかしら」

「そうかしらって。それはそれでいいものよ」

「厳しいがしつかりとした言葉であつた。」

「鶏肉やお魚もね」

「暫くソーセイジやハムともお別れか」

「鶏肉やお魚でもあるじゃない」

「味が違うんだよ」

「無然とした顔で妻に答えた。」

「それも全然な」

「贅沢言わないの。本当に痛風になったら洒落にならないわよ」

「ああ、わかつたよ」

「無然とした顔でまた妻に答えた。」

「それじゃあな。それでな」

「ええ。じゃあ今日からね」

「わかつた」

遂にジョンも折れた。そうしてその日からビールからワインになり食卓も実にヘルシーなものになった。野菜や豆腐が多くなり肉も鶏肉、そして魚が主体になった。それは外食でも同じであつた。

「チキンカツか」

「そうよ。それとチキンバーグ」

レストランでクリステイが注文したのはそれだった。それと海草のサラダに野菜のスープであつた。麦芽パンにデザートはアップルパイだった。

「どうかしら」

「外に出ても同じか」

「お弁当もそうしてるじゃない」

「ああ」

塞ぎ込んだような顔で妻に応えた。

「あの和食のあれか」

「そうよ。おかげで体調がいいでしょ」

「そつえばそうかな」

あまり本意ではないがそれに頷くのだった。

「それはな」

「痛風だけじゃなくて糖尿病にも気をつけないとね」

「それもか？」

「そうよ。ただでさえこの星って痛風に糖尿病は多いじゃない」

「そうだな」

これはジョンもよく知っていた。こうした話は事あるごとに新聞やインターネット、テレビに出るものだからだ。どうしても目に入らずにはいられないものなのだ。

「だったらついでにね。注意しましょう」

「ああ、わかったよ」

「あとはランニングでもする？」

「スポーツもするのか」

「健康管理には運動が一番よ」

また言うクリステイだった。

「それもはじめてみる？」

「それもか」

「とにかくよ。ここはこの際ね、徹底的にやったら？」

「食事制限に運動か」

「そついうこと。どう？」

あらためて彼に対して問うてきた。

「痛風になりかけなら余計にね」

「何かそこまでやるなんてな」

「それでもサービスしてるのよ」

テーブルの上に置かれていく料理を見せながら夫に告げる。見ればそれなりにカロリーの高そうなメニューもある。チキンカツやチキンバーグのことだ。

第三章

「ほら、これだって」

「カツだからだな」

「そうよ。鶏肉でもカツはカツ」

こう言う。

「気をつけてね」

「全ては健康の為か」

「だから。なつてしまつてからじゃ遅いの」

食べながらも厳しい言葉が続く。

「わかつたわね」

「わかつたよ。じゃあ食べるか」

「こういう食べ物だつて美味しいじゃない」

「まあな」

サラダを食べてみる。レタスと若布、それに小さく千切りにした人参と玉葱が絶妙なハーモニーを醸し出しフレンチドレッシングが実にそれ等を見事に引き出していた。

「美味しいことは美味しいな」

「わかつたらね。これはこれで楽しみましょう」

「これでもいいことはあるか」

「あるわよ。わかつたらさあ」

「ああ、食べるさ」

まだ不満を抱えながらもそのヘルシーな食事を食べ続ける。そうして暫くの間ヘルシーな食事に運動をして過ごしていたがやがて二人のいる惑星で騒動が起こった。

突然身体が変貌し醜く膨れ上がるのだ。それは最早人の原形をとどめてはおらず最早化け物になってしまうというものだ。ある日突然そうなり惑星はパニックになった。そのニュースの報道をテレビで観ながらジョンもクリスティも顔を真っ青にさせていた。

「何なのかしらね、この病気」

「伝染病か!？」

ジョンはまずはこの可能性を考えた。リビングで難しい顔をしている。

「ひょっとしてこれは」

「そうかしら」

「今厚生省が必死になって調べているらしい。症状が出た人間をまず片っ端から病院に入れてな」

「つまり隔離ってことね」

「そうなるな。結局は」

「物騒な話ね」

こう言って不安な顔を見せるクリスティだった。

「こんな怖い病気が流行るなんて」

「そうだな。けれど俺は」

「どうしたの？」

「実は職場に何人もかかっているんだ」

「何人も!？」

「ああ、部長もな」

彼の直属の上司である。

「その病気になって。あっという間に病院送りだ」

「部長さんがおられなくなったの」

「おかげで課長の俺が部長の仕事も代理しているよ」

困った顔で述べるジョンだった。

「全く。他にも部下が何人も同じ病気にかかってな」

「何か不潔な状況なの？」

「いや、全然」

首を横に振って妻の言葉に答える。

「ごく普通のオフィスだぞ」

「それで伝染病に何人もかかるの？」

「そうなんだ。おかしいと言えばおかしいな」

「そうね」

「部長でおかしいと言えば」

いぶかしむ顔でここで言うのだった。

「あれだな。痛風持ちなんだ」

「あら、それなの」

「ああ。好きなものはホルモンとビールでな」

「韓国料理ね」

「それが好きで。それでなんだよ」

「内臓はコレステロール高いのよ」

「わかってるさ」

だから今彼等はホルモンどころか内臓料理も食べていないのだ。
そこも注意しているのである。

「それはな」

「痛風ねえ」

「そういえば」

ここで彼はあることに気付いたのだった。

「この病気にかかった奴は皆」

「どうしたの？」

「痛風か糖尿病の気があつたな」

「あら、成人病持ちの人ばかりなのね」

「大体そうだ」

こう妻に述べる。

「そうでなかったらそれに近い奴ばかりだな」

「何かそこにあるのかしら」

「さてな。そこまではわからないさ」

彼は医者ではない。ごく普通のサラリーマンだ。だからわかることもここまでだったのだ。しかも何の確証もない話でしかなかった。

「俺は医者じゃないしな」

「そうなの。それにしても」

クリステイはここでジョンを気遣う顔を見せてきた。

「貴方は大丈夫なの？」

「俺か」

「そうよ。職場の人何人かかかってるわよね」

「ああ」

妻のその言葉に対して頷く。

「そうだけどな」

「だったら貴方も危険じゃない。そうでしょ」

「言われてみればそうだな」

「一回検査してもらったら？」

「おいおい、また検査か」

今度は笑った。妻の検査という言葉聞いてだ。

第四章

「この前あれじゃないか。痛風の検査してもらったばかりで」

「そうだけれどね」

それは何もなかったのだった。確かに乳酸値やコレステロール値は結構なものだったが危険水準には至っていなかった。クリスティの早いうちの対策が功を奏したのである。

「それでも。やっぱり」

「今度は伝染病のか」

「そうよ。何かあつてからじゃ遅いから」

「とはいってもな」

ここで彼は言うのだった。

「まだ何もわかっていないじゃないか」

「何もって？」

「だから。伝染病だったらウイルスがいるだろ」

「ええ」

「それが何もわかっていないんだぞ」

彼が今言うのはこのことだった。

「何もな。わかっていないんだぞ」

「わかっていないって？」

「だから。どんなウイルスが引き起こしているかな」

「わかっていないの」

「ニュース見てみるって」

いささかうんざりとした様子を入れて妻に告げた。

「原因不明の急病って言ってるじゃないか」

「そういえばそうね」

「そういえばじゃなくて。本当に何もわかっていないから、まだ」

「どうしようもないの」

「ああ、どうしようもない」

これははつきりと言えた。

「今のところはな。とりあえずお役所が何て言うかだ」

この星系はアメリカ政府管轄だ。州扱いであり知事が政務にあたっている。この辺りは地球にあった頃とあまり変わってはいない。

「問題がわかればすぐに動くだろうし深刻なら」

「閉鎖とか隔離ね」

「そうなる。まあ様子を見ておこうな」

「けれど本当に」

ジョンにこう言われてもどうにも不安を隠せないといった感じのクリスティであつた。

「何かあつてからじゃよ」

「だから。まだ何もわかっていないじゃないか」

心配性の妻に思わず苦笑いになった。

「何も。どうしようもないんだって」

「せめて会社を当分休んで」

「そんなこと言ったらもう家にだってウィルスが入ってるかもな」

「もう……」

「空気感染だつて考えられるだろ」

「空気感染……」

伝染病で最も恐ろしいケースである。このシリウスではないがある星系では狂犬病が空気感染する惑星があり大変な騒ぎになったこともあるのだ。伝染病も星によって様々なのだ。

「嘘でしょ、それは」

「可能性としてはあるさ」

青くなった顔でそれを否定しようとする妻に対して述べた。

「ありとあらゆる可能性がな。だからあれこれ悩んでも」

「仕方がないって言いたいのか？」

「その通りだよ。まあわかってからな」

「それだともう」

「もう話題変えよう」

ラチが明かないのでこうすることにした。

「いいかい？それで」

「話題を変えるって」

「ほら、これでも見て」

ここでジョンは一枚のDVDを取り出してきた。それは。

「去年のドラマのやつだ。観るかい？」

「ドラマ？」

「そうさ。ほら、あの魔女が奥さんになったってやつだよ」

「地球にあった頃のをリメイクしたあれね」

「面白いだろ、あれ」

「そうね。確かに」

「それでも観てみよう」

こう提案するのであった。

「それでいいな」

「ええ、あのドラマなら」

「よし、じゃあ決まりだ」

妻が乗ってきたのでまずは一安心だった。内心胸を撫で下ろしながらDVDをかけるのだった。早速幕で乗った魔女の服の美女がホノグラフで出て来た。

二人でそれを観て気を晴らす。そうして今はこの話題から離れた。その間にこの奇病はシリウス中で次々と発生していった。やがて皆あることに気付いたのだった。

「面白いことがわかってきたな」

「今度は何なの？」

二人は今は一緒に外に出ていた。見れば格好はそれぞれジャージだ。お揃いの青いジャージである。二人でランニングをしている。家が立ち並ぶ中を夫婦揃ってである。

「あの病気だけれどな」

「ええ」

クリステイは走りながら夫の言葉に応える。夫もしっかりと妻の

横についてきている。

「あまり健康でない人間がかかっているな」

「あまり健康でない人間に？」

「健康な人間は全くかかっていない」

こう妻に述べるのだった。走りながら。

「全くな」

「全くなの」

「かかるのは痛風か糖尿病持ちかその予備軍」

「確かに限られてるわね」

「そうだろ？おかしな話だよな」

「いえ、そうは思わないわ」

だがクリスティはここまで聞いても至って平気な顔で答えたのだった。顔は進行方向である正面をじつと見たままだ。額の汗が爽やかである。

第五章

「私は別にね」

「おかしくないのか」

「だってそうじゃない」

さも当然といったような口調だった。

「不健康な生活していたら当然身体が弱るわよね」

「ああ」

「そうしたら免疫も落ちるし」

「だから伝染病にかかるのか」

「私はそう思うわ」

やはり口調はそのままだった。

「だから。それはね」

「不思議じゃないか」

「そう思うけれどね。話を聞く限りは」

「そうなのか」

「他にわかったことはあるの？」

夫にさらに尋ねる。道には通行人もいれば飼い主に連れられて散歩をしている犬もある。夕方のごく有り触れた街の日常の中である。

「病気について」

「命には別状のない病気らしいな」

「それは何よりね」

夫の言葉を聞いて微笑みになった。やはりこのことは大きかった。

「それで死なないっていうのは」

「あとどうもよくわからないんだが」

「今度はどうしたの？」

声で首を傾げる夫に対して問う。

「いや、この星についてだよ」

「この星？」

「最初から変なウイルスはなかったよな」
「ええ」

夫の言葉にまずはくりと頷く。

「それはね。確かになかったわ」

「命に関わるような悪質なものはなかった」

このことをまた言う。

「確かその筈だったよな」

「今のところはね」

「けれど入植して二百年も経つし」

「それでも見つかるケースだって考えられるじゃない」

「ううん、どうかな」

ジョンにとってはどうにも引つ掛かるものがそこにはあるのだった。そしてそのことを隠すことなく率直にクリスティに対して述べるのだった。

「空気感染するようなものならそれこそな」

「まず見つかるっていうの？」

「入植の時にまずするのはそれだよ？」

ウイルスの探索である。入植に際して行つのはまずそれなのだ。探索をして生活環境を整備するのと共にそれを優先的に行いそれから本格的に入植するのが常だ。

「それでどうして」

「訳がわからないのね」

「そういうことだよ。何でかな」

「とにかく」

首を捻りながら夫の疑念に応えた。

「患者さん達の診察結果を見ないとわからないわよね」

「全くだ。じゃあ今は自分が病気になるっていいことを神に感謝するか」

「そういうことね」

こう言い合っても不安が消えることはなかった。次第に病気の調

査が進みあることがわかった。それはシリウスの市民達にとっては驚くことであつた。

「成人病!？」

「あの肥大化するあれが!？」

「嘘だろ!？」

誰もがニュースを見て驚きの声をあげた。驚かざるを得なかつた。

「そんな筈はない」

「そうだ」

彼等は口々に言う。

「こんなことつてあるのか」

「まさか」

容易には信じられなかつた。だが次第に。皆確かなデータを見せられて納得した。せざるを得なかつたというのが現実であつた。

「まさかとは思つたが」

「そうね」

ジョンはこの日の朝テーブルで新聞を読んでいた。クリステイがそれに応える。二人の今日の朝食は和食だつた。味噌汁にメザシが見える。

「こんなことつてあるのね」

「ウィルスはウィルスだつた」

ジョンは言う。新聞から目を離してはいない。

「しかしな。それだけでは何の影響もないなんてな」

「突然変異でそうなつたなんてね」

「ああ、全く」

どうにもわからないといった様子で首を横に振りながら妻に応えた。

「こんなこともあるのか」

「まだ突然変異の原因については調査中だつたわね」

「ああ、それはまだだ」

新聞を読みながら妻に答える。

「それはな。しかしだ」

「とりあえずの原因はわかったのね」

こう夫に問うた。

「それでも」

「そうだな。何はともあれ痛風や糖尿病の人がこのウイルスにかかると」

「ああなるのね」

「原因がわかればどうということはない」

これまでになく素っ気無い言葉だった。今までとは状況が全く異なっていた。

「それさえわかればな」

「それさえなのね」

「ああ、それさえた」

こう妻に述べる。

「わかってしまえばどうともなる、病気というもののはな」

「それで患者さん達は伝染病ではなく痛風や糖尿病の治療を受けているのね」

「ああ、そうだ」

また妻に答えた。

「今はな。だから俺は助かったのか」

「言っただしょ。痛風や糖尿病になったら大変だって」

「それはわかるが」

苦い顔で妻に言葉を返した。

「それでも。これは」

「これは？」

「随分苦しい治療だな」

「あら、そうかしら」

「ビールが飲めなかった」

まず言うのはこのことだった。

「これが一番辛かったな」

「ワインじゃ不満だったのね」

「好みの問題だからな」

仕方ないというのだ。酒というものはとりわけ嗜好が出るものだからこれは仕方のないことであつた。ジョンも自分でわかっていることはわかつているのだ。

「これについてはな」

「そんなに嫌だったの」

「まあそれでも」

しかしここで言葉を変えてきた。

「和食とかは悪くなかつたな。鶏肉もな」

「そうでしょ？ヘルシーもいいものよ」

にこりと笑つての夫への返答だつた。

「特に今日の御飯はね」

「これか」

「どうかしら、今日のお米は」

御椀にある米をさして問う。

第六章

「いつもとちよつと違つてしょ」

「ちよつとどころじゃないな」

真顔で首を傾げさせての言葉だ。

「これはな」

「そうかしら。美味しいじゃない」

「硬い」

不機嫌な顔でその米を噛み締めつつ語る。

「この米は。あんまりにも硬いぞ」

「硬いのは当たり前よ」

しかしクリステイはこう言われても平気な顔をしていた。

「このお米はな」

「お米は多少柔らかいのがいいんじゃないのか？」

「だから。このお米はそういうお米じゃないのよ」

「意味がわからないんだが」

「それは白米のことでしょ」

いぶかしむ夫に対して述べた。

「それは。そうでしょ」

「まあそうだがな」

「玄米は別よ」

見れば今日の米は玄米だった。白米ではなくそれだったのだ。だから硬いのである。白米と玄米は最早別物といつてもいい食べ物だからだ。

「これはね」

「白米なら喜んで食べられるのにな」

「玄米は身体にいいのよ」

にこりと笑つて夫に述べてきた。

「それもとともね」

「そんなにいいのか」

「これさえ食べてれば死なないって位にね」

「それでもな」

そう言われてもどうにも食べにくいようだった。

「これは。ちよつと」

「一つ言っておくけれど」

「今度は何だ？」

「白米ばかり食べているとね」

「それはあの肥大化とは関係なかった筈だよな」

「違ふのよ。脚気になるのよ」

また随分と変わった名前の病気だった。ジョンにしてはそうであつた。

「脚気にね。なるのよ」

「脚気って何だ？」

「あれっ、知らないの」

「知らないも何も」

首を傾げつつ妻に答える。

「そんな病気の名前は聞いたことないぞ」

「そうだったの。まあ最近あまりない病気なのは確かね」

「あまりか」

「それでもなることはなるのよ」

これだけは釘を刺してきた。

「変な食生活をしてるとね」

「お米を食べていてなるのか？」

「それかなるのよ」

顔を少し前に出して夫に告げた。

「これがね」

「お米を食べていれば死なないって聞いたけれどな」

日本に昔からある言葉だ。

「それで何でまた」

「白米はね。あれなのよ」

「あれ!？」

「そうよ。デンプンだけでビタミンB1が足りなくなってる」

「それでなるのか」

「下手したら死ぬわ」

怖い言葉が出て来た。

「下手をしたらね」

「死ぬってな」

怪訝な顔で首を傾げずにいらなかった。

「そんなに怖い病気だったのか」

「そうよ。身体がだるくなって遂にはね」

「それは本当に怖いな、確かに」

「それでも麦とかを食べていればならないけれどね。鶏のレバーとかもいいのよ」

「そうなのか。じゃあパンもだよな」

「白米ばかりじゃね」

また笑って述べた妻だった。

「脚気になるから。だからね」

「そういうことか」

「わかったらじゃあ」

ここまで話したところで玄米を御椀に入れる。おかわりだった。

「食べましょう。いいわね」

「ああ。しかしな」

そう言われてもどうも難しい顔をしたままだった。

「この玄米はどうも」

「合わないの？」

「これ以外に何かないのか？」

こう妻に対して問うのだった。

「他に何か食べ方が。ないのか？」

「あることはあるわ」

ジョンにとっては有り難い返答だった。

「麦飯ね」

「麦のか」

「ええ、白米の中に麦を入れたものだけれど」

「じゃあそれを頼む」

すぐに妻に頼み込んだ。

「それを。今度な」

「わかったわじゃあ白米が駄目ならね」

「頼むよ、幾ら何でもこれは食べにくいよ」

「美味しいと思うけれど」

「人それぞれだよ、それは」

苦い顔で妻に告げた。

「俺には玄米は合わないよ」

「仕方ないわね。それじゃあ」

「けれどまあ。あれだな」

それでも彼は言った。

「病気になるないようにしてくれるのは有り難いな」

「そうでしょ。それはね」

「とにかく。何でも気をつけないといけないか」

その玄米を食べながら言う。

「病気になるない為にな」

「そういうこと。何かあるかわからないからね」

「ああ、全くだよ」

二人で話し合うのだった。その後ビタミンB1不足、即ち脚氣が突然変異してミュータントになってしまう病氣が発生した。全く以って何がどうなるのかわからなかった。少しのことであってしまふその病氣が恐ろしい変貌を生み出す。遠い彼方にある星の話である。

2
0
0
8
.
9
.
1
9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1896f/>

思わぬ奇病

2010年10月8日15時17分発行